

## 巡洋艦出雲

1913年10月、連邦軍がトレオンを明け渡したニュースが伝わり、市民は革命軍が首都に攻め込んでくるという最悪の事態を憂慮するようになった。各国の公使館の中でも、危機の到来に備え、本国へ艦船の派遣を要請し、義勇兵を募るなどの動きが始まっていた。

10月21日の日米新聞は日本政府が数隻の軍艦をメキシコへ派遣する噂があると報じた。大統領選挙の数日前、足立公使に招かれた市内在住邦人有力者十数名が公使館で対策会議を開いた。悲劇の十日間のような事態の再現に備え、対策を協議し、公使館近くの空家を借りて、食料寝具から医薬品までを備蓄することになった。<sup>63</sup>

11月13日、日本政府が装甲巡洋艦出雲、艦長森山慶三郎海軍大佐をサリナ・クルスへ派遣することを決め、一両日中に出発すると発表した。出雲にはワシントンで書記官を勤めた埴原正直が同乗し、派遣目的は墨国在住の邦人三千人を保護するためであった。英独仏西各国が軍艦を派遣して自国民や商権保護にあたっていて、日本も当然それをすべきであるし、今回の動乱の原因はひとえにアメリカがウエルタを承認しないことに端を発しているわけで、邦人の安全をアメリカに委ねることだけは絶対に避けるべきであると、日米新聞は喜びの意を表明すると同時に、日本はアメリカに追随することなく、日本独自の対墨政策を打ち出すべきであると論じた。<sup>64</sup>

巡洋艦出雲が来航するにあたり、鷲谷には気になることがあった。今回の出雲派遣に関して日本政府が「在留民に慰安を与え、場合によっては保護を与えるのが目的であって、他には断じて何らの理由もない」と断言していたことである。両国の親善のために同艦の来航を利用しようとする在留同胞やメキシコ国民の願いが叶えられないのではと危惧した。北部における内乱のためメキシコ太平洋岸では石炭が欠乏していたが、メキシコ政府は備蓄を取り崩して出雲に供給することを了承していた。このような異例の好意にたいして、きちんとした答礼をすべきであると鷲谷は気をもんでいた。<sup>65</sup>

マンザニーヨやマザトランなど、港の周辺に住む日本人が、仮に出雲に避難を求めるようなことがあれば、効果があるのは間違いない。しかし当時、在留邦人の半数近く、約二千人が北部諸州に住み、これらを収容することは不可能に近い。ましてや、在留邦人が保護を必要としている状況ではなかった。革命が始まって既に三年、日本人の生命が脅かされたということはなく、政府も革命側も日本人であることを知れば、決して危害を加えないことは既に明らかであった。出雲が果たす役割は邦人の保護ではなく、国威の発揚と、日墨親善に寄与する以外にない、と首都在住の日本人は思っていた。しかるに、日墨親交に出雲艦を利用する等のことは避ける、という当局者の気持ちが理解できなかった。<sup>66</sup>

出雲を出迎えたのはメキシコ公使館から田邊書記官、日本人会からは鈴木副会頭、田中会計であった。その帰路マンザニーヨのあるコリマ州都に立ち寄った彼らに、市の有志か

ら出雲歓迎の申し出があったが、アメリカに気兼ねしてこの申し出を断った。フェリス・デ  
ィアス大使を断ったように、アメリカに気兼ねして歓迎を断るようでは、我国は威信を失  
い、遂には墨国民の軽蔑を招く。鷲谷は危惧していたことが現実となり焦燥した。67

安達公使の期待に反し、在留民の保護のための乗り組み将士の入京がなく、数日に及ぶ  
電報による押し問答の末、漸く森少佐、中村中尉その他八名の下士卒が来ることになった。  
彼らは公使館に止まり、防御の任務に当たるための機材を持ち込んでいた。目的が目的で  
あり、世間に知らせるのは不味かろうと、初めは軍艦の便乗者が上京するのだと言いふら  
していた。しかし、翌日の新聞に森少佐一行が入京したことが報じられ、事が明らかにな  
った以上一日も早く軍務省へ報告に行くべきところを、既に二週間絶っても公使は何の手  
配もしなかった。アメリカやメキシコの新聞が一様に、日本海軍軍人が公使館保護のため  
に公使館に止宿していることを報じ、日本公使館には商人と称して多数の日本人が出入り  
しているが、これはその実海軍軍人である、というような記事が出ていた。68

在留邦人の中で安達公使への批判が高まった。メキシコの事情を全く知らず、恐怖の余  
り疑心暗鬼を生じて墨都の危険を針小棒大に報告し、公使館を保護するために日当二円の  
義勇兵を募集するとか、在留民保護のために出雲艦を呼ぶとか、出雲の将士が入京して墨  
都の人に歓迎されれば憲政軍の反感を買うとか、必要のない五六軒の空家を借りこんで陸  
戦隊上陸の支度を為し、毎月数百円の家賃をただ空しく払っている、といったものであつ  
た。批判はまだ続いた。堀口前公使はメキシコ人と親密に交際され、新聞の社交欄に日本  
公使の名前を見ない日はなかったほどなのに、安達公使就任以来一度も外人を招いて宴を  
張ったことがない。殊更甚だしいのは、前年の天長節、今生陛下最初の天長節にもかかわ  
らず、晩餐会はさておきレセプションも催さなかった。公使夫人が病床にあるとの報に接  
したウエルタ夫人は、未だ面識がないのにもかかわらず、わざわざ公使館に見舞われた。  
しかるに公使夫人は病氣回復後に未だ返礼をしていない。このままであれば日墨間の関係  
にも悪影響を及ぼすと気を揉んだ。69

1月20日、軍艦出雲の外交事務を処理するために同艦に搭乗して来た埴原外務一等書  
記官は、墨都の内外関係者が森山艦長以下出雲の将士を歓迎したいと要請しているのに対  
し、これを受けるべきかに就いて安達公使と協議するため、伊藤慶一書記生と共に首都に  
やって来た。メキシコの日本人会は、艦長が首都入りしないのは、安達公使が米国に遠慮  
しているが故であると激昂し、安達公使へ陳情した。艦長招待は在留民保護に実効がある  
ことと、米国もしくは憲政軍に対して何等遠慮する必要はないというのが主旨であった。  
日本人評議員会は、艦長が上陸しないのは却って有害であると打電して艦長の来訪を求め  
た。埴原書記官は、艦長の首都訪問の時期にあらず、との意見であったが、先に公使館入  
りしていた森少佐は在留民と同じ意見であった。結局公使は多数派意見を取り入れ、艦長  
へ招待状を発信した。艦長以下十四名の将校は二十四日マンザニーヨを発ち、途中コリマ、  
ハリスコ両州知事の歓迎を受け、二十六日、堂々とメキシコ市へ到着した。70

メキシコ政府は外務省、軍務省からそれぞれ二人の歓迎委員を出し、特別列車でグアダラハラに一行を迎え、二十六日午後十二時十五分メキシコ市に到着した。停車場には軍楽隊が君が代を吹奏し、群集四百余名「日本万歳」を唱え、拍手喝さい鳴り止まぬ間を、政府が手配した八台の自動車に分乗し、ホテル・メトロポリタンへ向かった。その日の午後一時、安達公使はメキシコ歓迎委員を招待し午餐の饗応をし、更にその夜は政府要人を招待した晩餐会を開催した。翌二十七日、艦長以下将校は政府の提供した車で故ベニート・フアレス大統領の墓に参り、フアレス大統領遺族と都知事の歓迎を受けた。一同礼拝を終わり、柵の外に出るなり待ち構えていた群集は一斉に「ピバ・ハボン」を連呼した。71

その日の午後、大統領に謁見した。大統領は歓喜の情をもって一行を迎え、午後の饗応には内閣各大臣、接待委員が連なり、森山艦長は起って大統領に感謝の意を表した。大統領は「・・・日本もかつて我々が遭遇したような困難を経験したことがある・・・我もその困難に打勝つ方法を修養中であり、決して前途に悲観はしていない・・・某国は我が処置に対し非難の声を発している。しかし、もし我が執政が間違っていたなら、正義を愛する日本国の海軍将士と快談をすることはなかったであろう・・・諸氏と食卓を共にすることは歓喜に堪えぬ・・・」そのあと大統領官邸であるチャプルテペック城を見学した。夜九時政府招待によるコロン座での観劇が開催された。海軍将士一行が入場すると観客一同日本万歳を高唱し、劇場割れんばかりであったという。72

翌28日、一行は午前弾薬博物館及び弾薬製造所を参観し、午後一時からチボリ・レストランにおいて在墨日本人会主催の歓迎会に臨んだ。在留民参加者は二百五十余名、宴が終わると撃剣、柔術、相撲等の余興があった。夜八時半、軍務大臣主催の晩餐会。1月29日、ピラミッド見学、夜は外務大臣晩餐会。最後の日三十日は朝から疎水工事参観、午後五時より艦長主催の告別の宴がホテル・メトロポリタンで開催され、ブランコ海軍局長ほかメキシコ政府接待委員、メキシコ人記者団十数名、公使館員、主だった在留民三十名程度が招待された。艦長の演説に続いて、ブランコ氏の送辞、在留民代表鈴木ドクトルの送辞があつて、一同停車場に向かった。政府接待委員が同乗、列車の前後には万が一に備え、武装した護衛兵が乗った。停車場には群集が黒山のように集まり、一行の自動車が到着すると、ピバ・ハボン、ピバ・メヒコを唱えた。午後八時、特別列車は軍楽隊が演奏する中、列車が徐行すると、お互いが帽を振り、名残を惜しみながら、グアダラハラへと向かった。

73

埴原書記官は二十日間メキシコ市に滞在した後ワシントンへ向かった。伊藤書記生はテキサス経由メキシコ北部で馬場書記生から業務を引き継ぎ、さらに反軍の動静を研究した後、サンフランシスコで埴原書記官と落ち合い、二月末日本へ帰国することになった。出雲艦はメキシコ海域に留まり、1914年8月23日、日本が対独宣戦布告をするなりドイツ極東艦隊追跡の任務に就いた。海軍軍令部参謀森電三少佐は再びメキシコ市へ戻り、

暫く当地に滞在して政治、経済、軍事、教育、実業その他諸般の調査を行い、二月下旬からは各地に出張した。<sup>74</sup> さらに帰艦してカリフォルニア湾を北上した森少佐は四月二十日ごろ、ソノラ州グアイマスで上陸し、邦人保護にあたった。<sup>75</sup>

1914年7月10日、森少佐は忽然としてチワワ市に現れた。以下日米新聞に掲載されたチワワ日本人会々長石川荘一の報告である。翌十一日午前十時、森少佐はフアレス市日本人会会長土屋秀吉と石川荘一を伴って州庁を訪問した。ビクトリアノ・ウエルタが国外逃亡する僅か四日前のことである。サカテカス攻防戦で大勝し、二万の軍隊と共に州都に戻っているはずのパンチョ・ビヤに面会するためであった。待つほどなく出てきた知事の顧問役ガルサは少佐遠来の労を謝し、来意を問うた。少佐は憲政軍が在留日本人の生命財産を保護されたことに謝意を表し、将来益々親交を固めるためであると応えると、ビヤが任命した知事フィデル・アピラがビヤの民事補佐官シルベストゥレ・テラススを伴って現れた。日本政府がウエルタに武器弾薬を供給していると信じていた二人は、初めは何か抗議をするために来たものと誤解していたようであったが、すぐに釈然とした模様で、憲政軍成功の暁には日本政府の承認が得られるよう尽力願うとの申し入れを受けた。森少佐は独立戦争の英雄ミゲル・イダルゴ神父の銅像に花輪を捧げることと、戦場にて負傷した兵士の見舞いを申し出た。イダルゴ墓参は翌日知事自ら案内することになり、ガルサに伴われて直ちに二つの病院を訪問した。森少佐が負傷した兵士の手を握り言葉をかけると感極まって落涙するものもあった。午後は諸外国の領事館を訪問した後、ジェネラル・フェリペ・アンヘレスの指揮する砲兵旅団に導かれた。アンヘレスと懇談した後、共に百余門の大砲を検閲し、さらに憲政軍少佐三名の案内で市内見学をおこなった。その夜森少佐は日本人会に集まった百人余の邦人に、出雲艦の派遣理由、帝国の近状、海外発展の急務、日墨親善、日本民族発展地としての墨国談から在住邦人の心得に至るまで一時間半に及び話した。<sup>76</sup>

翌十二日、森少佐は早朝から日本人が世話になっているメキシコ人を歴訪し謝意を述べから州政府高官に伴われて州庁前のイダルゴ公園へ向かった。献花の式典が終わると集まったメキシコ人は歓喜の声をあげ、少佐に握手を求めるもの引きも切らず、ついには誰からともなく日本帝国万歳を唱え少佐の健康を祝した。地元の新聞は翌朝この様子を大きく報道した。森少佐は憲政軍本営を訪れいよいよパンチョ・ビヤと面会することになった。少佐は眼光爛々たる將軍の前に単座し、力強い声で日本政府ならびに国民はメキシコ南北両軍のいずれにも偏らず、ただ墨国及び墨国民に対して深く同情すると述べ、武器の輸送は政府の事業ではなく民間商社の純然たる商業契約に過ぎないことを説明し、在留日本人への保護を懇願した。最初は厄介な抗議に来たと思い込んでいたビヤは、日本政府と国民の言葉を、メキシコ人を代表して謹んで受けると述べ、穏やかな表情になり日本人の保護を約束し、イダルゴ参拝の礼を言った。両者の打ち解けた会話は一時間に及んだ。以下石川会長の記述である。「別れに臨み、將軍は少佐を抱擁し厚く感謝の辞を述べたるが、將軍近侍者の語る所によれば、未だかつて森少佐の如く親密なる待遇を受けたるものなく、其

鄭重にして打解けたる今日のピヤ將軍は平生無数の訪客に接する將軍とはまるで別人の如くなりしとの事にて何れも奇異の感に撲たれざるは無かりき。斯くて在留邦人の多少不安に思ひ居たるピヤ將軍との会見は予想外の大成功を持って終わたり」77

サン・ルイス・ポトシの日本人会は森少佐が同市を訪れたときのことを日米新聞に報じた。森少佐は既に十六都市の日本人会を訪問していた。森少佐は何がしかの寄付をし、これまで見てきた日本人会の中で同市の日本人会(日本人十五名)が最も結束が硬いと絶賛した。78

日米新聞本社墨国通信員の記事に次のようなものがある。出雲艦が在留同胞保護の目的でメキシコに来たとき、某参謀が上陸し、オブレゴン、ピヤを初めとする諸将と会見した。彼は後日、在留同胞に対しての次のように語った。「諸将一も談ずるに足らず悉く木偶なり、馬鹿なり、白痴なりと罵倒し去りて意気頗る豪なるものありき・・・」79 これらの記事から、森参謀は精力的にメキシコの主要都市をめぐり、在住邦人と話をし、革命分派の指導者と会っていたことが窺える。

1920年2月28日、上院外交委員会メキシコ関係調査小委員会に於いてジョージ・カロサーズが証言した。諮問委員長フランシス・キアフルは「メキシコ在任中、日本の陰謀に関しどのような情報を得たか」と質問した。「私がメキシコ市にいたとき、日本の海軍将校がジェネラル・ピヤを訪問したことを、ピヤから聞きました。私は1915年2月5日、國務長官にその内容を報告しています。」とカロサーズは答えた。カロサーズが送った報告は次のようなものであった。「ジェネラル・ピヤが私に告げたところによると、彼がメキシコ市へ入った12月、メキシコ海域にいた日本艦の艦長がピヤに会いに来た。艦長がピヤに会ったのは、恐らくピヤが合衆国をどう思っているかを知りたかったと思われる。彼の国はアメリカの行状により深く心を傷つけられ、米国に対して戦争を準備している、と艦長はピヤに探りを入れるように言った。彼らは既に三年前から準備をはじめ、あと二年ほどかかるとも言った。これに対しピヤが応えたのは、合衆国の人々は彼の友であること、更に、もしアメリカがメキシコ以外の国と戦争するようなことになり、そのときピヤがメキシコ政府に関わっていれば、メキシコは可能な限りアメリカに協力するであろう、であった。ピヤによると、艦長はひどく落胆し、本題を明かさなかった。ピヤはエルパソでスコット米軍参謀総長にこのことを伝えようとしたが、回りに人が多く詳しい話が出来なかった」キアフル委員長はピヤの信憑性について確認したのち、この報告について國務省がどう反応したかを質問した。國務省からの反応はなく、この報告の内容について更に調査を求めるような指示はなかった、とカロサーズは答えている。80

ジョージ・C・カロサーズが最初にピヤと出会ったときは三十八歳であった。でっぴりと太ったカロサーズは食料雑貨商と不動産業を営む傍ら、1900年から13年間トレオンの領事を勤めた。1911年の中国人大虐殺の時には中国人の助命に少なからぬ貢献を

した。カロサーズはパンチョ・ビヤを盗賊と呼んでいたが、ビヤがトレオンを占領し治安を保ちアメリカ人を保護するのに惚れ込んで、急速にビヤと親しくなり、1913年、ブライアン國務長官から、ビヤ対応特務官に任命された。<sup>81</sup>

ビヤはカロサーズを信頼していたわけではなく、賄賂で動かせるからであったとも言われている。カロサーズには詐欺師、ゆすり、賭博、女たらしとの風評が絶えなかった。<sup>82</sup>

1914年12月、出雲艦は旗艦として浅間と肥前を従え、ドイツ軍艦を追ってエクアドルからチリ沖にあった。この話はカロサーズのでっち上げであったのか。

歴史家パコ・イグナチオ・タイボ・二世は著書「パンチョ・ビヤ」の中でこのエピソードに触れている。彼は艦長が使節を送ったのはサカテカス戦の直後が最初で、メキシコ市でビヤと面会したのは二度目であるとしている。もしそうだとすれば、森少佐はその間ずっとメキシコ内に潜伏していたことになる。その使者は日本がアメリカを攻撃したときのビヤの反応について探りを入れたという。著者は更にビヤとヒュー・スコット米軍参謀総長との会合についても触れている。会議は1月7日から始まり、その三日目、ビヤはスコットの車に乗り込み、車は暫くエルパソの坂道を登ったり下ったりしていたので、ビヤが言うように周りに人が多く、はっきりと切り出せなかったのではなく、言葉の障害でスコットが理解できなかったのであろうと推測している。<sup>83</sup> ビヤとヒュー・スコットはお互いが尊敬しあう仲で、スコットの古文書の中にはビヤが発信した五十四通もの手紙があるという。<sup>84</sup>

その他何かメキシコの日本人について掴んだ情報があるか、との委員長キアフルの質問に対し、カロサーズはエルパソで見つけた日本語とスペイン語で印刷されたビラのことを調査した経緯を話した。書かれていた内容は、メキシコ人の反米闘争を日本が支援を約束したもので、作成したのはサンフランシスコ在住の日本人商人で、日本政府との関連はなく、それ以上の発展はなかったと証言した。さらにカロサーズは、1916年2月7日、カリフォルニア半島での日本政府の行動について報告した。サンアントニオに住み、ポルフィリオ・ディアス時代マザトランで軍の司令官をしていたメキシコ人から聞いた話によると、ディアス政府と日本は秘密条約を結んだと言う。日本がメキシコの領土に海軍基地を設け、カリフォルニア半島に拠点を築いていると言う噂がカリフォルニアで取り沙汰されているが、現実にはそれ以上のことが行われていると思われる。その時が来れば、奴らは契約書を示して、奴らの行動を正当化できる。奴らは叛徒を援助するため、既に武器弾薬庫に大量の兵器を貯えていたとしても自分は一向に驚かない、と言う内容であった。

85

63. 日米新聞、Nov. 12, 1913

64. Ibid. Nov. 13, 1913

65. Ibid., Jan. 4, 1914

66. Ibid. Jan. 14, 1914
67. Ibid. Jan. 18, 1914
68. Ibid., Feb. 2 and 3, 1914
69. Ibid., Feb. 9 and 10, 1914
70. Ibid., Feb. 11 and 12, 1914
71. Ibid., Feb. 13, 1914
72. Ibid., Feb., 14, 1914
73. Ibid., Feb. 22~24, 1914
74. Ibid., Feb. 27, 1914
75. Ibid. May 4, 1914; 森山艦長が日米新聞あてに発信した文書により、グアイマスで邦人保護のため将校一名を残してきたことを明らかにしている。
76. Ibid., July 27, 1914
77. Ibid. July 28 and 29, 1914
78. Ibid. April 29, 1915
79. Ibid. Jan. 30, 1917
80. Committee of Foreign Affairs, "Investigation of Mexican Affairs", Government Printing Office, 1920, P1777
81. Ibid. P1755
82. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P318
83. Paco Ignacio Taibo II, "Pancho Villa, Una Biografia Narrativa", Editorial Planeta Mexicana, 2006, P477
84. Ibid. P403
85. Committee of Foreign Affairs, "Investigation of Mexican Affairs", Government Printing Office, 1920, P1778